天地

ネットワーク テーブル 517号

天地シニアネットワーク 2021．3・17

TENTI TODAY			1
会員の広場			2
随 想	英会話の楽しみ（１５） 単数と複数	伊那 闊歩	2
論 考	中国人から見た日本人の言語表現理（２３） 言い切りを避けてぼかす心理－その１－	兪 彭 年	6
随 想	小金井市の散歩事情	臺 一郎	7
回 想	海外でのゴルフ モーリシャスでのゴルフ 第２編	森永 善彦	9
回 顧	バブル期・証券業界真っただ中（３）	津田 孚人	１２
事務局			１４

****

TENTI TODAY

****

ケガや病気にはならない方がよさそう・・“病床確保”で入院できないのかも？

緊急事態の解除が注目されていますが、解除賛成の一番の理由は、病床確保が進んだこと、と報道されています。なるほどと思っていましたが無理な病床確保をしているのではないか、と思わせる例を聞きました。以下、そのお話です

家内が付き添ってくれて、友人見送りのために中央線で東京駅へ行った。東京駅で下りエスカレーターに二人並んで乗っていたところで、**エスカレーターが突然ストップ**、家内が転倒して頭を強打、動けなくなった。救急車で新橋の慈恵医大に搬送してもらったが、入院を拒否されてしまった、骨にヒビが入る重傷で、自分で付き添いをしなくてはいけないので、息子のいる首都圏外の病院へつれてきた。タクシー代４万円、入院中の家内に付き添っている。

付き添いが必要な高齢者が、突発事故に出会い、付き添ってくれていた奥さんの付き添いをしなくてはいけない悲劇。どうも“病床確保”のトバッチリを受けたと見えてしまうのですが・・・

****

＜私兵＞

総務省の過去の接待問題が政治がらみで、国会、マスコミで連日大きくとりあげられていますが、国民の最大の関心はコロナ禍の先行きです。それにしても、建前を軽視して本音だけで行動しているとしか見えない、政界、官界、日本の将来をどのように考えているのか心配です。報道では、総務省は菅首相の意にならない人は外されるとのことですが、＜私兵＞を抱えるように見えて心配です。

****

会員の広場

英会話の楽しみ（１５）

伊那　闊歩

15. 単数と複数

1）

英語の名詞には単数と複数の区別があり、加えて不定冠詞 a や定冠詞 the がついて、名詞はこまごまと分類されている。日本語と同じく名詞の数え方も千差万別で煩わしくまことに面倒くさいが、それだけに、ここを疎かにしておくといつまでたっても自信をもって会話することができない。ネイティブにとっては常識中の常識で何の問題もないのだが、そもそも数えられる(可算)名詞か数えられない（不可算）ものなのかも慣れていないと戸惑うことがおおい。

たとえば travel と journey。どちらも日本語では「旅」と訳されるが、注意すべきことには travel は「旅という行動を意味する非可算名詞」で、journey は数えられる具体的な旅なのだ（＊1）

I like travel, but it’s often tiring. （旅は好きだが、退屈することもおおい）

Did you have a good journey? （良い旅行でしたか）

比較的短期の journey を trip または tour, excursion などと言いこれらも数えられる名詞なのである:

I made a quick trip to Kyoto.(トンボ返りで京都まで行ってきた) 単語はその意味を覚えるだけではなく、どのような状況で使うのか、使い方をも十分知っておくことが大切である。

family (家族), audience (聴衆), company (会社), government (政府)、team (チーム), ・・・など集合名詞と呼ばれる名詞は、それらを構成する一人ひとり（１つひとつ）を念頭におく場合は動詞だけ複数形として

My family have decided to move to New York. (私の家族はニューヨークに転居することに決めた)

家族をひとまとめと考える時には family は単数で
The average family has 2.5 members in Japan. (日本の平均的家庭は 2.5 人の家族から成っている)

家族をひとまとめにしてそれらが複数存在する場合には、家族が複数形になり
Several families live on the island. （数家族がその島に住んでいる）

一方、people も集合名詞であるが,これを人々、人民などの意味で使う場合、そのまま複数扱いして

There are three people in the room.（部屋の中には 3 人の人がいる）
という。

person (人)という単語があるが、会話では people のほうが一般的なのだ。
people をわざわざ複数形 peoples にして

There are three peoples in the island.

と言えば、この peoples は民族を意味するので「その島には3民族が住んでいる」
という意味になる。

常に複数として使用される集合名詞はこの他 police (警察), clergy(聖職者), cattle(牧畜牛),・・・などがある:
In Myanmar police chase people through the streets to arrest them.
(ミャンマーでは警察が街路で人々を追いかけ捕まえている)

There are cattle in the pasture.（牧場には牛がいる ）(*2)

常に単数名詞としてしか使われない集合名詞もある。たとえば移動できる家具、テーブル、机、いす、タンスなどをひっくるめて furniture という。furniture には 複数形がなく単数だけだが a もつけない。家具一式と言う場合 a set of furniture, たくさんの家具は a lot of furniture という。

この種の集合名詞には mail (手紙や小包などの郵便物), machinery (機械類), clothing (服や靴など身に着ける類のもの), ・・・などがある(＊3):

I received a lot of mail yesterday. (昨日、郵便物をたくさん受け取った)

I will send you an answer about it by e-mail. (その答えは e-mail でおくります)

（＊1） M. Swan: Practical English Usage （Oxford）

（＊2） 去勢された牡牛は ox . 去勢されていない牡牛は bull そして牝牛は cow, 牧畜牛が cattle である。豚は英国では pig, 米国では hog, 古英語には swine という語がある。食用になったものは beef（牛肉）、pork（豚肉）である。

（＊3） 日本語では「あとでメールします」と言うが、英語では、手紙やはがきと区別するためはっきりと e-mail します と言わなければならない。

2）

Bread, cheese, ice, fruit, rice, paper, uranium, vegetable・・・など物質名詞も数えられる名詞か数えられないものか戸惑うことが多い。化学元素そのものは数えられないものなので冠詞はつけずそのままの形で使う。たとえば

Nickel is a hard, silver-white metal. (ニッケルは固い銀白色の金属だ。＊4）
Sodium is a soft, silver-white metal. (ナトリウムは軟らかい銀白色の金属だ)
Sulphur is a light-yellow non-metallic solid. (硫黄は薄黄色の非金属個体である)

metal は可算、不可算どちらもある。

Fruit は不可算名詞だが grape は可算名詞、vegetable も可算名詞である。
Fruit is very expensive, but vegetables are cheap. These grapes are sweet.
(フルーツは高価だが、野菜は安い。このブドウは甘い)
などというが、これらはひとつひとつ覚えていかなければならない。数えられる名詞の数え方についても名詞の前に数量を示すさまざまな語句、たとえば
A cup of tea, a glass of water, a pinch of salt (一つまみの塩), 等々
もそれぞれ料理本や料理番組などこまめにチェックして覚えるほかない。

抽象名詞も数えられるものと数えられないものがある。life はどちらもあり

Is there life on Mars? (火星に生命があるだろうか) Black lives matter.
Children are always so full of life. (子供たちは常に生命にみちあふれている)

Information(情報) には複数形がないわけではないが、デパートや空港などで見られるように そのままの形で使う:
He gathered information about it. （それに関する情報をあつめた）

Congratulation を「オメデトウ」の意味で使う時には必ず複数形にして
Congratulations on your graduation! (卒業おめでとう) などと言う。

英語の達人からもよく聞くことなのだが、英語（会話）が自由自在に使いこなせるようになるには、とにかく時間がかかるのだ。英語（会話）即修法などがあるとしても所詮、不完全なものにちがいない。

（＊4）米国の 5 セント白銅貨は nickel で普通名詞として扱われる: A nickel is a five-cent coin in America.（米国ではニクルは５セントコインのことです）。5 セントコインにはニッケルが含まれており、いざ戦争となるとこれを回収し薬莢などをつくるのだそうだ。つまり、世間がニッケルの貯蔵庫なのだ。日本では 50 円玉にニッケルが含まれている。

3.）
all は「すべての、全部の」という意味で形容詞として可算名詞にも不可算名詞にもつけることが出来る。all + 無冠詞複数名詞 という形－all books on the table (テーブルの上の本全部)、all animals in Africa － をとる場合が多いが、all the の後には一般に複数名詞がつづく:
Where have all the flowers gone, long time passing? (ピート・シーガーの名曲)
all the computers in this room (この部屋の中のコンピュータ全部)

不可算名詞や特定の地域を示す場合は all the の後は単数にする
all the money (そのお金全部、money は不可算名詞である)、all the town。
また、慣用的表現では
We played tennis all afternoon. [in all the afternoon などとしない]
She stayed here all day. [all the day などとしない]

このほか慣用的に all night, all year, all week, all winter, all summer と言い、間に the をはさまない。

Not all という形で部分否定になる:
All dogs are animals, but not all animals are dogs. (犬はすべて動物であるがすべての動物が犬であるとはかぎらない)
Not all birds can fly. (すべての鳥が飛べるとは限らない)

全否定の場合には Not all を No にすれば良い
No elephants can speak English! (すべてのゾウは英語を喋らない)

all は「みんな、全部」という意味で不定代名詞として扱われる。この時「すべての人々」の意味では複数扱いにする。「すべての物、事」を意味して単独で all を使う場合は単数扱いにする:
All were saved. (すべての人々は救われた)
All is over. (万事休す)

All of the buildings were destroyed by the earthquake.（建物はすべて地震で破壊された。All には of 以下の説明がついていて単独とは見做されない）

店で品物を注文して最後に店員からかけられる言葉: Will this be all? (以上でよろしかったですか)

all が副詞として使われる場合は「すっかり、全く、ひどく」など文意を強調する時で、たとえば

The old man lives all alone. (老人はたったひとりで住んでいる)
All of a sudden we heard a big sound outside. (突然外で大きな音がした)

all が代名詞にかかる時にはいろいろな言い方がある;
Give my regards to them all. (皆さんにくれぐれもよろしく)
She's invited all of them. [この all は不定代名詞である]

all が人（物）の数を表す時その数は 3 人（3 つ）以上を念頭においている:
All five men are hard workers. (5 人はすべて勤勉である)
数が 2 人（2 つ）の場合の両方をいうときには both を用いて both the books あるいは、both books という。
I'll take all three pens, please. とは言うがペンが 2 本の場合は all two pens とは言わず I'll take both pens, please. と言う。

Hold the steering wheel with both hands. (車のハンドルを両手で持ちなさい)
Both cars are Toyotas. (車は両方ともトヨタだ)

both の入った否定文は部分否定の場合が多いが、全否定の場合もあるので追加説明が必要である:

We don't need both those cars. One is enough. （その車、両方ともは必要ではない。一台で十分だ）

all と whole は「すべての」という意味で同じだが、all my family というところ whole をつかえば、語順を変えて my whole family としなければならない。同じく all the town は the whole town となる:
The whole town was destroyed by the earthquake.

不可算名詞に対しては、whole よりは all のほうが好まれる;
I've drunk all the milk. と言い、I've drunk the whole milk. とは言わない。

****

中国人から見た日本人の言語表現心理（２３）　　兪彭年

言語表現心理（㈣）

言い切りを避けてぼかす心理－その１－

ある日、NHK テレビの気象情報を見ていて、ふと変だなと思った。それは字幕には「桜開花早まる」とあるのに、気象予報士は「桜の開花は早まりそうです」と言うのだ。字幕では「早まる」と言い切っている。予報士は「早まりそうです」とぼかして言い切らない。
「保険料が上がれば将来受け取る年金も増えるとはいえ、対象となる大企業などのサラリーマン層には、足元の負担感が強まりそうだ」を「…足元の負担感が強まる」と変えた場合はどう受け取られるだろう。「強まる」と言い切れば断定になり、「強まりそうだ」は様子の推定となる。断定を避けるため、レトリックとして言い切りにせず様子の推定にすることはあり得るだろう。
　「今度は市街地で使われたようだ。被害の広がりが心配だ」を「今度は市街地で使われた。今度は被害の広がりが心配だ」と変えた場合も同じようなことが考えられないか。つまり推定の助動詞「ようだ」を使って断定表現にしないレトリックがあり得る。
「日系人だけを不当に隔離し財産を奪った過ちを、記憶すべきだと思った」を「記憶すべきだ」とどう違うだろうか。
　「…記憶すべきだと思った」は話者個人の考えとなり、「記憶すべきだ」は話者の強い主張となる。強く主張するのを避けてただ個人の考えとする柔らかい表現にするために「…と思う」をつけたと考えられないか。
　「金魚すくいでよく見る“和金”なら、上手く育てれば 10～15 年は普通に生きるという」を「……10～15 年は普通に生きる」としたらどんな違いが出るだろうか。「…という」は伝聞を示すとされるため、話者個人の見解でなくなる。「…生きる」と言い切ると話者自身の見解となってしまう。話者がなんかの理由で自分の見解としたくないために「という」のを付けた可能性はあり得るだろう。
　「そうだ」「ようだ」「と思う」「という」などは断定を避けるためにレトリックとしても良く使われる。つまりぼかす働きをしている。

　日本人はあいまい表現を好み断定表現を避ける心理、判断を素直に言い切らずぼかしてしまう心理が強く働くようだ。日本在住すでに 20 年以上になる中国人作家唐亜明氏は日本語世界は断定的な口調を排すると言っている。その原因はさまざまであろう。人によってまた場面によってまちまちだ。

たとえば責任逃れ、自信欠如、確認できないため、推定や伝聞であるため、慎ましい態度を示すため、遠慮深くやんわりとした言い回しにさせるため、それにレトリックなどがあろう。

あいまい表現の反対は断定表現だが、あいまい表現のあいまいさは内容と語尾表現に表れる。話す内容がはっきりせず、意味がとりにくいのが内容あいまい表現であり、語尾にきて断定せず言い切らず、ぼかす言い回しにしてしまうのが語尾あいまい表現だ。

日本人の話を聞いていて、ものごとの判断をストレートに言ってもよいのに言わず、明らかな事柄に対しても断言せず、語尾をぼかした言い回しにしてしまうことに違和感を覚えるときがある。中国人なら素直に表現してしまうのに、日本人はなぜ素直に表現しないのかと聞きたくなってしまう。

しかしよく考えてみればこれこそ日本人の言語表現心理であって、中国人とは違うところだ。それにぼかす心理によって日本人の言語表現は柔らかく聞こえ、語尾と語気が変化に富み、よって情緒的になる。

逆に中国人は断定表現が多く、ぼかす表現は少ない。たとえば気象情報で中国では「今天阴、局部地区有雨。明天晴到多云」と断定表現になっていて、日本では「今日は曇り。ところどころに雨が降るでしょう。あすは晴れのち薄曇りでしょう」とあいまいな表現になっている。

日本の気象情報は「…でしょう」と「…見込みです」の言い回しが特に多い。気象情報は予報であるため、言い切ることは避けて推測とし、あいまい表現を用いる方が合理的だと思われるからに違いない。しかし中国はあいまい表現を用いない。

それから、テレビなどで中国人の会話を訳した日本人の会話を聞いていると、日本人のぼかす心理が自然と働いているのが良くわかる。中国語が小さい声ででてくるので、訳された日本語と同時に聞こえる。

たとえば中国人は「我一定能赢」と言い切ったのに、日本語訳は「わたしはきっと勝てると思います」となっていて、「わたしはきっと勝てます」と言い切りにしてなかった。中国人が「她能理解我的心情」と断定して言ったのに、「彼女は僕の気持ちを理解してくれるだろう」と訳し、「彼女は僕の気持ちを理解してくれる」と断定表現に訳さなかった。

「放在这里也不会妨碍别人的」は「ここにおいても人の邪魔にはならないようよ」と訳され、「ここにおいても人のじゃまにはならいよ」でなかった。

****

小金井市の散歩事情　　臺　一郎

4ヶ月ほど前から週に3～4回の散歩を始めた。コロナ禍のせいもあって、去年の秋頃からしばらくは僕もやや巣ごもり的な状態が続いたのと、持病の糖尿病の病状が医者の出す薬を服用するだけでは中々改善しなかったからだ。

最初の内はもっぱら運動不足の解消や健康維持を目的に、我が家の周囲 2 キロほどを早足で歩いた。けれども歩き慣れてくるとすぐに物足りなくなる。そこで、我が家からほど近く、小金井市を南北に貫く幹線道路『小金井街道』を1km ほど南下し、

高架上を走る中央線武蔵小金井駅のホームをくぐり抜け、さらに駅から 200m ほど南の前原坂上の交差点まで行ったなら右折して『連雀通り』を西に、すなわち国分寺方面に向って 700m ほど歩き、『新小金井街道』との交差点まで行ったところで引き返し、同じ道で我が家へと戻るコースに変えた。

これだと散歩の歩行キロ数は約４km となる。距離的に不足感はないし、昨年完成した再開発地区の横を通るために景観的にも変化があって飽きない。しかしそのコースを何度か歩いているうちに、ふと医者だか医事評論家だかが新聞紙上で「散歩が体に良いとは言っても、平坦な道ばかり歩いていたのでは運動不足解消のエクササイズとしては十分でない」と書いていたことを思い出した。

「それなら」というわけで、翌日からは我が家を出て小金井街道を前原坂上の交差点まで歩いたら、連雀通り方向には曲がらずそのまま下り坂となる小金井街道を平坦になるところまで 500m ほど歩き、さらに少し先の野川まで行って川沿いの遊歩道を西か東にしばらく歩いてから自宅に戻るコースへと再変更した。ちなみに野川の川沿いの遊歩道をどちらの方向にどれだけ歩くかは、その日の天気や体調や気分で適当に決めた。

小金井市は、市の南部を東西に貫く連雀通りのすぐ先で 15m ほどストンと落ち込む国分寺崖線、通称“はけ”と呼ばれる崖地形が続いている。小金井街道はこの 15m ほどの高低差を 500m ほどの距離の緩い坂道で上ったり下ったりするよう道路設計がなされている。500m で 15m の高低差だから確かに急傾斜の坂道ではないのだが、実際に坂道を歩いて上り下りしてみると、車で通行するのと違って、それほど緩やかな坂道とは感じない。

小金井街道は幹線道路なので乗用車やバスやトラックが多数往来するが、“はけ”の崖には、このほかにも地元の歩行者や自転車などが使う生活道路的な坂道が沢山ある。これらの生活者用の坂道は傾斜が急で、電動アシストなど付いていない従来型の自転車では、降りて押さないと登り切れないほどである。小金井市の“はけ”には、こうした住民用の生活道路の坂道が優に 20 本近くある。

散歩でしばしば駅向こうの崖下の野川辺りまで行くようになると、往路と復路では違う坂道を歩くようになる。小金井市の南部、“はけ”の崖の下の低地をうねりながら西から東へとゆっくり流れる野川沿いの遊歩道を１キロ近く歩くと、我が家からの散歩の総距離は５キロ前後になる。これだけ歩くと、散歩から帰るとしっかり疲労感を憶えるようになる。また歩行者用の坂道は、前述したように傾斜がきつく心臓や足腰には結構な負担となる。特に帰路の登り坂は慣れないうちはしんどくて、ようやく平坦地にたどり着くと心臓がドキドキと早まるほどだった。

こうした歩行者用の坂道の多くは江戸時代から近郷の農民や旅人達に使われ、「質屋坂」だの「念仏坂」だの「白伝坊の坂」だの「平代坂」といった歴史を感じさせる名前がつけられている。坂の途中には市が設置した説明板などもあるので、立ち止まって読みながら坂道の上り下りを楽しむようになった。そうなると散歩は単に健康や運動不足解消のための行為ではなくなり、歴史に想いを馳せたり、坂道の名前のいわれ等を知って楽しむ趣味の行為としての性格が強まった。

小金井市には歴史的ないわれのある坂道や、都市計画から外れてしまったような細くてオートバイさえ通行不能な不思議な遊歩道がいくつもある。そんな坂道や遊歩道をたびたび散歩していると、歩いて気持ちの良い散歩道には幾つかの条件のようなものがあることに気づいた。例えば自然が豊かで、四季折々の花や植木や鳥や蝶などとの出会いが楽しめるとか、小さな子供連れや高齢者などが交通事故や犯罪に巻き込まれる不安を感じることなく安心して歩けるとかだ。

ほかにも良い散歩道となるには満たすことが望ましい条件や環境があるので、次回は“はけ”の上の武蔵野台地側にある小金井市北部の遊歩道のことなども紹介しながら、そうした条件や環境について書きたいと思う。

****

海外での想い出　　森永善彦

2021 年 2 月 11 日

海外でのゴルフ　　**モーリシャスでのゴルフ　第２編**

第１編の続きをお話しします。

世界の通信会社間の会議は１週間近く続いたので、週末の土曜日だったか日曜日にゴルフを部下２人とする事にしました。ゴルフ場は首都ポートルイスの街の外れに有りました。イギリスがモーリシャスを植民地にしていた時代に、イギリス人の暇つぶしの為に作られたゴルフ場だったのでしょう。いわゆるリゾート地のゆったりしたゴルフ場では無く、英国人が手軽にゴルフを楽しむために作った感じの小さなゴルフ場でした。

土地の余裕がなかったのか、何か所か１つのホールのフェアウエーを２つのホールで共同で使っている所が有りました。（添付ゴルフ場のレイアウト図の右側部分に、青線を引いてあるのがフェアウエー共有ホールです。 左側にも共有部分は有ると思いますが、何処かを示すのは割愛しました。）

兎も角１ホールの広さは大きくは有りませんでした。日本ではホールを共有するゴルフ場を見た事は有りません。そのホールでは、クロスしているもう一つのホールのプレーヤーのプレーを確認してからボールを打たなければなりませんでした。そうしないと、当方のホールに突然共有ホールのプレーヤーが現れて、ボールをぶつける恐れがありました。

幸いその様な場所では十分注意をしながらプレーをしたので、他のプレーヤーにボールをぶつける事態は起こりませんでした。問題はコースに隣接している道路上で起きました。

先に行ったように狭い土地のゴルフ場なので、あるホールのすぐ横を、と言うかホールの一部に一般の道路が走っていました。フェアウエーの隣はラフではなく普通のアスファルト道路でした。

主要道路ではないので、偶にしか車は走っていませんでした。従って我々も余り道路や車に注意を払わずプレーしていました。

或るホールに差し掛かり、名手の私がドライバーでティーショットをバシッと打つと、何故かボールは意に反して大きく左に飛んで行きました。当たりは非常に良かったので

すけどね。中弾道のライナー性でした。日本なら方向的には OB になるボールですね。
　ボールの行方を目で追うと、左側にはすぐ道路が有り、不運にもなんと1台のオンボロな小型乗用車が我々の行く方向に平行して走っていました。おっとこれは拙い、と思ってみていると私のボールは走っている車を追っかけて飛んで行きます。
そして、コースの外れでワンバウンドしたボールは道路上でオンボロ車の後部の金属製のバンパーの真ん中辺りに命中しました。
やばいと思った瞬間、更に悪いことにボールの当たった衝撃でその車のバンパーがパカっと外れ、道路の上に落ちました。優秀な日本車ならこの程度でバンパーが外れる事はまず起こりません。しかし南海の孤島のモーリシャスで走っている車は、エンジンもブルンブルンと音を出す様な年式の古い車でした。
遠くなので良く聞こえませんでしたが、アスファルトにバンパーがガチャンと落下した音で運転手は異変に気が付くと思いました。所がその車はバンパーの落下に気付かず、バンパーを道路上に残したまま悠々と走り去っていきました。

　異国の地で車を壊して補償問題が起きるのは正直“御免被りたい”と思いました。部下は“さすが森永さん、車のバンパーにボールを命中させるとは大したものですね”等と変な感心をしていました。（東京では所属していたヨーロッパ部でも IDC でも、コンペで常にベストグロス賞を取るので、ゴルフの名手として名を馳せていました）
しかしボールをぶつけた本人としては、そんな戯言（ざれごと）に付き合っている暇は有りません。兎も角気持ちは動転していました。
運転手が気付く前に逃げるが勝ちと、部下２人をせかして、そのホールはプレーをギブアップし、道路脇に止まったボールも拾わず一目散に次のホールに移動しました。
ボールが当たって凹むなら兎も角、バンパーが外れるとはいい加減な取り付け方をしていたのでしょう。
運転手も戻って来なかったので、その後は又落ち着いてプレーを楽しみました。走っている車にボールをぶつけたのは後にも先にもこれだけです。しかもバンパーを叩き落とすとは！！
その時は車の一部に破損を加えたので、大変だと言う気持ちで一杯でしたが、よく考えるとかなり稀な体験をしたと今にして思います。ゴルフプレー中に打ったボールを走っている車にぶつけ、バンパーを叩き落としたと言う例は他には皆無でしょう。ギネスブック物かも知れません。
人にボールを当てた事は一度有ります。大学時代合宿で、あるゴルフ場のあるホールでバンカーに入ったボールを打とうとしていた時、グリーン上に他のプレーヤーがいました。アプローチが上手くホールに寄ったとピンの周りで小躍りしている奴がいました。私はそれに気が付かず、バンカーからパシッと打ったボールの行方を目で追うと、飛んで行く方向に人がいるのでアッと思った時、ボールは見事に彼の首の後ろに命中しました。瞬間、彼は大袈裟にグリーン上に大の字になってひっくり返りました。
（元々芝居気がある人間でした）

人や車にボールをぶつけたのはこの２回だけです。木の枝や岩等には何回もボールをぶつけて来ました。大学の時は加害者として驚いて、“おい大丈夫か”と一応被害者に安否確認の声を掛けました。
しかしよく見ると、大袈裟なアクションの割にはすぐ立ち上がったので、打撲は大した事は無かったようです。そこで、“人がバンカーからプレーる時に、ホールの周りでうろうろするのは危ないぞ！”と、先輩の威厳を持って一喝して済ませました。

彼のお陰でバンカーからハーフトップで飛び出したボールは、首筋に当たった後ポトンと上手くピンの近くに落ちて、1パットでホールアウト出来ました。

以上、南海の孤島でのへんてこりんなゴルフと大学時代の小さな、小さなエピソードのお話でした。
参考までにモーリシャスのゴルフ関係の写真を添付します。
またその内フィジー、南アフリカクルーガーパーク、ガーナ、ザンビアでの、日本では体験出来ないゴルフのお話を致します。 以上

首都ポートルイスの街の風景、インド系の人が多いですね！

プレーした The Gymkhana Club（このプレーヤーは私では有りません）
（30 年近く前の話なので、ゴルフ場の名前を憶えていませんでしたが、google map でサーチしたところ、ここが街に隣接した唯一のゴルフ場だったのでここでプレーしたと思います。）

コースレイアウト図（青い線が攻略ルートが交差している所）
（想い出のホールが何番か覚えていませんが、道路が横を走ってそうなのは　印を付けたところだと思います。）

****

＜回顧＞第３回

バブル期・証券業界・真っただ中（３）　　津田孚人

当初は、証券会社へ出向していた１９８３年（昭和５８年）４月から４年間を中心にバブル時代の一角を知っていただきたいという動機で始めたのですが、始めるとさらに新たに思い出したりすることが出てきました。日記をつける習慣はなく、メモをとるのも苦手、また当時お目にかかった多くの方が天国におられるという状況なので、自分の記憶だけになりました。間違い、あるいは思い違いもあるかもしれません。ご容赦ください。苦しいけど楽しかった時代だったように思えます。もし、思い出のエピソードなどありましたら、どうぞお寄せ下さい。
コロナ禍にありながら、N・Yも東京も株式市場は高値をつづけています。＜バブルの再来＞と見る人が多いようですが、個人的には、違うとみています。前回は、戦後初めてのことでしたが、今回は2度目、前回の苦い経験がありますし、新しい技術革新の時代を迎えて、産業構造が大きく変わろうとしています。夢と希望がありますから、株式投資に資金は向かいます。そこで、前回のバブルが如何なるものだったか、自分たちの体験を、仮に小さなものでも残すのは必要と考えます。

株式投資が大衆化されたのは、オイルショックのあと。それまでは、「祖父（あるいは親）の遺言で株式投資は絶対にしない」という人たちがまだ大勢いました。＜退職金は定期預金＞というのが当たり前でしたし、個人的に証券マンと話していると白い目でみられ、隠れてあうという状態でした。当時、証券投資のプロと思われていた生命保険会社の証券課にいましたが、資金需要旺盛な企業が、額面割り当増資をするのを引き受けるだけで、株式の純投資など、殆ありませんでした。
　このような戦後の日本社会に根づいていた＜株式投資＝リスク投資へのアレルギー＞が、どのように解消し、最後のバブル期のような非常識な時代へどのようにつながっていったのか、定説があるでしょう。その中であえて私見を展開してみます。

結論としては、昭和４０年代半ばに始まった、ゴルフ人気に端を発したゴルフの会員権取得の大衆化にあり、と考えています。経済的に余裕のある一部の人だけが密かに楽しんでいたゴルフでしたが、池田内閣の所得倍増計画が打ち出されたころから、一般サラリーマン層にも身近なものとなり始めました。健康指向は、ボーリングからゴルフへと移り、せっせと練習場通いをしました。しかし大きな壁となったのが、ほとんどのゴルフ場がメンバー制で、ビジターは拒否という閉鎖性でした。パブリックコースは少なく、ゴルフコースへ出るのは、思うようにできませんでした。そこで、ボーリング場ブームが去って、次のスポーツを狙っていたスポーツビジネス。列島は、ゴルフ場新設ブームとなり、個人は会員権を取得し、どこかのゴルフ場のメンバーになりました。ゴルフの会員権は、リスク資産です。しかし、それにはお構いなし、プレーができればよい、と割り切って取得した人が大半だったと思います。ゴルフ人気が高まっていくと、会員権の募集価格が上がりましたが、会員募集は順調でした。貸し出し競争下にあった銀行は、手軽に融資してくれました。

そういう流れの中で、多くの人が会員権は儲かるものだと言う事を知ります。ほんの一例ですが、昭和４６年か、４７年のころだったと思います。伊豆急行が子会社の稲取ゴルフクラブの株を会員権付で売り出す、２０万円（？）ですがご希望の方どうぞと誘いがあった。東京から新幹線を使えば日帰りできる、何にもましてゴルフ場を持てるという嬉しさから、初心者１０名ほどが手を挙げ、初めて自分のゴルフ場をもった。２年後、一人が、海外転勤のために売りましたが、２００万円以上（？）の益が出たのを多くの人が知りました。ゴルフの会員権は儲かるということが知れ渡りました。

もう一つ。オイルショックの後、よみうりパブリック（よみうりランド）、レークウッド（茅ヶ崎）、のように、パブリックコースがメンバーコースにかわりました。両コースとも、接待用ゴルフ場として、法人会員のみの募集でしたが、よみうりゴルフの当初の売り出し価格は＠１千万円、レークウッドは、＠３千万円でした。見送ったという企業もあったようですが、その後１億以上の価格になりましたから、投資としては最高の投資になったに違いありません。

このように、＜投資＞が一般化し、証券会社の店頭はにぎわい、株式へのアレルギーも薄れ、急速に投資ブームを迎えたようです。１９８６年、証券へ出向して３年たった頃だったともいます、かつての同僚部長が、部下を連れて相談に来ました。「部下が某証券で株の信用取引をしていて行き詰った、良い知恵はないか」ということでしたが、株などに関係なさそうな真面目な中堅サラリーマンが株の信用取引をしていた、というのには仰天しました。

話を証券界に戻します。１９７４年（昭和４９年）のオイルショックで金融は一気にタイトになりますが、１９７６年（昭和５１年）の後半になると、電力会社、スーパー、不動産、以外大企業の資金需要は落ち、金融機関は＜お金を貸してあげる＞から＜借りてもらう＞時代に入りました。
証券市場では、株式の時価発行が普通になり、企業は、金利の高い借り入れより、コストの安い時価発行増資にシフトしました。その後はさらに時価転換社債（いわゆるＣＢ）の発行へと進みました。時価発行は、自社の株価が高くないと妙味がありません。自社の株価に対する関心が、経営トップに強まりました。

オイルショックのあと世界経済は落ち込み、日本経済も厳しい状況を迎えます。事業収益が落ち込む中、注目されたのが財務の金融収益でした。大手商社が、金融収益で稼ぎ、本業の利益ダウンを支えていることが華々しくマスコミで報道されると、いわゆる“財テク”へ大半の企業は走り出しました。証券投資への関心が一気に高まり、証券会社の存在感が一段と増しました。
銀行の営業マンも生保の営業マンも、企業の役員に会うのが難しい中、証券の営業マンは、儲け話をもち込むので受け付けはさっと通り、忙しくてもあってくれると、いうのが大方の声でした。
　企業の方針で“財テク”に積極的なところは、自己資金だけでなく借り入れをして運用資金をつくり証券会社、信託銀行を通じて運用しました。通常、注文をもらって売買を実行しますが、大手証券は、量が大きくなるといちいち了解を取るのは大変なので、「営業特金」「一任勘定」を設けて運用を受託します。一任ですから、内容は問わず、ほぼ、何でもありだったのではないでしょうか。大手証券会社は、情報を早くつかみ、株式を集め、動かして、最後は個人に売り出す。この過程で、＜営業特金＞＜一任勘定＞は、便利な存在だったに違いありません。無配当の仕手株でも、上がれば良い株とはやされましたから、まともな運用がなされていたとは考えにくいところです。
　このころ、ガンの特効薬開発という情報で、中外製薬、持田製薬、などが暴騰、人気化していました。協和発酵工業もガンの特効薬を開発したと注目されましたが、飲み仲間の加藤財務部長から「社内にはそのような情報はない。どこから情報が出ているのかわからない」と数度聞いていました。たまたま銀座に二人でいた時に、知り合いの大和証券の常務に会い紹介しました。「ある」「ない」という二人の声が聞こえ、物別れに終わったようですが、のちに大和証券の買いの手は引っ込み、株価はもとに戻りました。大手証券の強引な営業が目立つ時代でした。
オイルショックにより、世界経済。日本経済がかわり、企業も個人も経済的な余裕がでて、それまでの投資アレルギーがなくなり、財テクが一番の目標に豹変した時代と考えるのですが・・・

次回、損が出れば補填し、約束した収益は確保するという念書、＜あった＞＜なかった＞で大問題になったところから始めるつもりです
****

事　務　局

****
＜投稿＞を歓迎します。

天地シニアネットワーク・テーブル・５１７号
発行：２０２１年３月１７日

天地シニアネットワーク事務局　（津田　孚人）
〒１１６－０００１荒川区町屋３－２－１
ライオンズプラザ町屋７０３
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電話：０３－３８１９－７６５１